



Title	『源氏物語』の出家の表現：男女の違いをめぐって
Author(s)	アッタヤ, チョーティカプラカーイ
Citation	詞林. 2002, 32, p. 13-23
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/67489
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

『源氏物語』の出家の表現

— 男女の違いをめぐって —

チヨーティカ普拉カーイ・アツタヤ

『源氏物語』では、多くの登場人物がそれぞれ出家する。出家の理由はさまざまであるが、女性の方はつらい男女関係が原因で出家する場合が多い。特に、密通した女性は皆出家する。一方、男性の方は厭世的感情を持ち出家を願う者が多いが、結局出家にいたる者はほとんどいない。本稿では、『源氏物語』における出家に着目し、出家する時の心情やその場面に用いられる言葉を考察し、男女のそれぞれの出家のあり方、対照的な出家のパターンについて論じていく。

一 男の「厭世」について

『源氏物語』の男女の出家を見ると、男性の方は女性とは違い、もともと道心を持っている者が多い。

① いにしへより本意深き道にも、たどり薄かるべき女方にだにみな思ひ後れつつ、いとぬるきこと多かるを、みづからの心には、何ばかり思ひ迷ふべきにはあらねど、

(若菜下 二六〇)

② いはけなかりしより、思ふ心ざし深くはべるを、三条宮の心細げにて、頼もしげなき身ひとつをよすがに思したるが避りがたき絆におほえはべりて、(夢浮橋 三六七)

① は源氏の言葉で、自分が昔から出家の意志を強く持っている」と述べている。② は薫の言葉で、幼いころから出家の意志が深い、母の女三の宮が絆となり、出家の願いが果たされないと述べている。『源氏物語』において、「いにしへより」、「いはけなかりしより」など、以前から道心を持つているという文は男性の場合だけに使われる表現である。女性の場合には、もともと道心を持つていると述べられることはまったくない。

また、男性が出家を願う時には、世のはかなさを深く感じ、厭世的感情を持つというパターンが見られる。

③ 常なき世はおほかたにも思うたまへ知りしを、目に近く見はべりつるに、厭はしきこと多く、思ひたまへ乱れしも、

(葵 六〇)

④ かくおほかたの世につけてさへわづらはしう、思し知る

ることのみまされば、もの心細く、世の中なべて厭はしう思しならるるに、さすがなること多かり。

(花散里 一四五)

⑤世の中思しつづくるにいとど厭はしくいみじければ、後るとも幾世かは経べき、かかる悲しさの紛れに、昔よりの御本意も遂げてまほしく思ほせど、(御法 四九七)

⑥世の中をかりそめのことと思ひとり、厭はしき心のつきそむることも、わが身に愁へある時、なべての世も恨めしう思ひ知るははじめありてなん道心も起こるわざなめるを、

(橋姫 三三)

⑦世の中をことさらに厭ひはなれねとすすめたまふ仏などの、いとかく、いみじきものは思はせたまふにやあらむ、見るままにものの枯れゆくやうにて、消えはえたまひぬるはいみじきわざかな。

(総角 三三八)

③④⑤は源氏の場合であり、③は葵の上の死後、④は藤壺が出家してしまつた後、⑤は紫の上の死後である。ここから、源氏の出家願望の根底には「世を厭う」という気持ちがあると見られ、この気持ちによつて源氏の道心は徐々に深まつていくことが分かる。⑥は妻との死別などで世のはかなさを経験した八の宮の心であり、⑦は大君の死後の薫の心である。世のはかなさを深く感じた二人は、それぞれ「世を厭う」という気持ちになり、道心が深くなると見られる。「厭う」という言葉は『源氏物語』の中に四十三の用例があるが、「世の

中」が「厭う」の対象であるのは十五例である。「世を厭う」という言葉は男性の出家願望を表す時に頻繁に用いられているが、女性にはこの言葉はほとんど用いられない。

明石入道の場合も厭世的感情にもとづく出家だが、「世を厭う」という言葉は彼の出家には用いられない。彼の出家は、次の⑧⑨⑩のように、何回も「世を棄てる」という言葉で表されている。

⑧すべて世の中を棄てたる身にて、年ごろともかくも尋ね知らぬを

(松風 三九〇)

⑨世の中を棄てはじめしに、かかる他の国に思ひ下りはべりしことども、ただ君の御ためと、

(松風 三九四)

⑩この身は長く世を棄てし心はべり、君たちは世を照らしたまふべき光しるければ、

(松風 三九五)

山本利達氏は、時勢に迎えられず、都での生活を棄てたいという点で、明石入道の出家は厭世的感情にもとづく出家といふべきであると述べている。つまり、彼の「世を厭う」気持ちは、都での生活を棄てること、「世を棄てる」とこと結びついているのである。それに対して明石入道以外の男性には、「世を棄てる」が使われることもあるものの、この言葉より他の言葉の方が多く使われている。他の男性が、厭世的な感情を持つ最大の原因は、愛する人との死別である。源氏は夕顔、葵の上、藤壺、紫の上などの死別で、八の宮も妻との死別で、薫も大君との死別で「世を厭う」気持ちは次第に

深くなる。しかし、明石入道の場合は他の男性とは違い、妻も子供もそろっている。愛する人との死別ではなく、世の中が彼を生きがたくし、それで出家したのである。山中裕氏は、「当時の貴族層では、出家・受戒後本当に僧侶となつて修行生活に入る者もあるが、一般には在家信者として仏弟子となるためのものである。」と述べている。「源氏物語」の中では、出家後、住んでいた場所を捨て、山の奥で暮らす人物はほとんどいない。とくに女性はお家した後も、まだもとの場所に住んでおり、夫や子供の世話になる。しかし、男性、例えば、朱雀院や明石入道は、それぞれ出家した後、住んでいた場所を捨てる。そのため、「世を棄てる」という言葉は、女性の出家よりも男性の出家に数多く使われているのだと考えられる。

朱雀院の出家は病気が大きな原因だと考えられるが、彼も厭世的感情を持っている。

⑪世の中こそ、あるにつけてもあぢきなきものなりけれ、と思ひ知るままに、久しく世にあらむものとなむさらに思はぬ。
(須磨 一八九)

ここでは、「世をあぢきなく思ふ」という表現で朱雀院の厭世的な感情を表している。「あぢきなし」という言葉はこの物語の中に六十七の用例があるが、「世の中」が「あぢきなし」の対象であるのは十五例である。この表現は、男性の出家願望を表す時に頻繁に用いられているが、女性の出家願望

を表すのに用いられない。

⑫去年今年とうちつづき、かかる事を見たまふに、世もいとあぢきなう思さるれど、かかるついでにも、まづ思ひ立たることはあれど、またさまざまの御絆し多かり。
(賢木 九〇)

⑬年ごろ学び知りたまへることどもの、深き心を説き聞かせたまつり、いよいよ、この世のいとかりそめにあぢきなきことを申し知らすれば、
(橋姫 一一九)

⑭中将は、世の中を深くあぢきなきものに思ひすましたる心なれば、なかなか心とどめて、行き離れがたき思ひや残らむなど思ふに、
(匂宮 一三三)

⑫では、父の桐壺院がなくなつた後、源氏の道心が深まることが述べられている。⑬では八の宮の道心、そして、⑭では薫の道心が述べられている。「(世が)あぢきなし」という言葉も、男性の出家を願う気持ちや厭世的感情を表す時にしばしば使われているのである。

『源氏物語』では、多くの男性は道心を持って出家を望むが、子供や恋人のことが「絆」となるため、出家を延ばしたり、結局出家しなかったりする。『源氏物語』の中の「絆」は二十八例あるが、もつともよく「絆」について言及されるのは、源氏で七回あり、次は八宮四回、朱雀院三回、薫二回、あとの人物は二回以下である。源氏の「絆」の多さが窺われるが、もつとも頻繁に彼の「絆」と言われる人物は紫の上であ

る。

⑮うしと思ひしみにし世もなべて厭はしうなりたまひて、かかる絆だに添はざらましかば、願はしきさまにもなりなまし、と思すには、まづ対の姫君のさうざうしくてものしたまふらむありさまぞ、ふと思しやらるる。

(葵 四四)

⑯では、源氏は紫の上のことが自分の出家の「絆」だと述べている。鈴木日出男氏は、「源氏は、紫の上とともに生きることが、そのまま現世に生きることのすべてであるような認識にあり、したがって彼女の存命するかぎりその出家を遂行することができない」と論じている。また、阿部秋生氏は、「もし紫の上が死ななかつたらば、源氏は出家することを考えなかつたであろうし、六条院の主人としての生活をさらにつづけていったことであろう」と論じている。紫の上の存在は源氏の出家の一番重大な絆と思われるものなのである。次に、他の男性の場合を見よう。

⑰なべての世の中すさまじう思ひなりて、後の世の行ひに本意深くすすみにしを、親たちの御恨みを思ひて、野山にもあくがれむ道の重き絆なるべくおぼえしかば、とぎまかうさまに紛らはしつづ過ぐしつるを、(柏木 二七九)

⑱「あり経るにつけても、いとはしたなくたへがたきこと多かる世なれど、見棄てがたくあはれなる人の御ありさま心ざまにかけとどめらるる絆にてこそ、過ぐし来つ

れ。独りとまりて、いとどすさまじくもあるべきかな。いはけなき人々をも、独りはぐくみたてむほど、限りある身にて、いとをこがましう人わろかるべきこと」と思したちて、本意も遂げまほしうしたまひけれど、見ゆづる人なくて残しとどめむをいみじう思したゆたひつつ、

(橋姫 一一〇)

⑲思ふ心ざし深くはべるを、三条宮の心細げにて、頼もしげなき身ひとつをよすがに思したるが避りがたき絆におぼえはべりて、かかづらひはべりつるほどに、おのづから位などいふことも高くなり、身のおきても心になかなひがたくなどして、思ひながら過ぎはべるには、またえ避らぬことも数のみ添ひつつは過ぐせど、(夢浮橋 三六七)

⑳は柏木の場合で、親たちが出家の「絆」だった。㉑で、八宮は女君たち、大君と中君のことが「絆」で、出家しなかった。㉒は薫の場合で、母の女三の宮のことが出家の「絆」となった。『源氏物語』の男性たちはそれぞれ「絆」ゆえに結局出家ができなくなるのである。

しかし、朱雀院の場合は他の男性とは違い、「絆」を思いながらも、出家してしまった。

㉓この御いそぎはてぬれば、三日過ぐして、つひに御髪おろしたまふ。(中略)今日は、世を思ひ澄ましたる僧たちなどだに、涙もえとどめねば、まして女宮たち、女御、更衣、ここのら男女、上下ゆすり満ちて泣きとよむにいと

心あわたたしう、かからで静やかなる所にやがて籠るべく思しまうけける本意違ひて思しめさるるも、ただこの幼き宮にひかされて、と思しのたまはず。(若菜上 三七)

②背きにしこの世にのこる心こそ入るやまみちのほだしなりけれ
(若菜上 六八)

⑬は朱雀院の出家する場面で、「ただこの幼き宮にひかされて」とあるように、朱雀院は女三の宮のことを心配しながら出家する。⑭は出家後の朱雀院が紫の上へ送った歌であり、ここで朱雀院は女三の宮のことを「ほだし」と言っている。他の男性は絆のため出家しないのに、朱雀院は絆を思いながら出家してしまうのである。

『源氏物語』の男性たち、源氏、八の宮、薫などは、絆があるまま、あるいは、心が迷っているままでは出家しないという理想の出家を追い求めるが、結局その出家は物語に描かれることはなかった。八の宮と柏木は結局出家せずに死んでしまい、薫も物語の最後まで出家しなかった。源氏の出家は幻巻に暗示されるが、遂に描かれることはなかった。つまり、初めから出家している人物は別として、『源氏物語』の男性で、その出家が描かれるのは、朱雀院ただ一人ということになる。しかし、彼には絆がないということではなく、彼は絆があるままで出家するのである。『源氏物語』の男性たちは出家を願っていないながらも、皆それぞれ「絆」に心を引かれてしまったのである。

以上、『源氏物語』の男性の多くは、もともと道心を持っており、そして、世のはかなさを見るにつれて、彼らの道心は深まっていくが、「絆」のせいで出家を延ばしたり、結局出家しなかったりする者が多いと見て来た。世のはかなさを経験して厭世的感情を持ち、そして出家を願うのは男性の出家のパターンのようである。では、女性の出家には、どんなパターンがあるか、また、女性の出家願望はどのような言葉で表現されるのか、次に見ていく。

二 女の「憂し」について

『源氏物語』には出家する女性が多く登場しているが、本稿では、出家の描写が多く、出家後も登場する女性たち、藤壺、空蟬、女三の宮、浮舟、六条御息所の場合に注目して考察する。

女性の出家願望を表すのにもっとも数多く用いられる言葉は「憂し」である。

①おほかたのうきにつけてはいとへどもいつかこの世を背きはつべき
(賢木 一二五)

②ただこの河内守のみぞ、昔よりすき心ありてすこし情がりける。「あはれにのたまひおきし、数ならずとも、思し疎までのたまはせよ」など追従し寄りて、いとあさましき心の見えければ、うき宿世ある身にて、かく生きとま

りて、はてははめづらしきことどもを聞き添ふるかなと、人知れず思ひ知りて、人にさなむとも知らせで、尼になりにけり。

(関屋 三五四)

①は藤壺が源氏と贈答する歌である。ここで、藤壺はこの世が「憂し」と思つて出家したが、いつになつたら世を捨て切ることができるのだらうと述べている。ここでは、彼女の出家の動機は「憂し」という言葉で表されている。②では、継子の河内守の好きな下心をきらつた空蟬が、継子にいいよられる自分のことを「うき宿世ある身」と思い、そのつらい運命から逃れるために出家している。彼女が自分を「うき身」とあると考へていることは、源氏との密通の場面や他の場面においても数多く見られる。

③いとかくうき身のほどの定まらぬ、ありしながらの身にて、かかる御心ばへを見ましかば、あるまじきわが頼みにて、見直したまふ後瀬をも思ひたまへ慰めましを、

(帚木 一七八)

④身のうきを嘆くにあかで明くる夜はとりかさねてぞねもなかれける

(帚木 一八〇)

⑤女君、心うき宿世ありて、この人にさへ後れて、いかなるさまにはふれまどふべきにかあらん、(中略)身ひとつのうきことにて嘆き明かし暮らす。

(関屋 三五四)

③と④は源氏と密通した時であり、ここでも、空蟬は自分を「うき身」と思っている。⑤は夫の常陸守が亡くなる時で

あり、親にも夫にも早く死別した彼女はこのような自分の運命を「うき宿世」、「うき身」と思っている。空蟬は「うき身」という思いを強く持つていたのである。そして、継子にいいよられた時にも、同じ思いを持ち、継子との縁を切るために出家してしまつた。つまり、彼女が出家したのは男性とのつらい縁がある自分の運命から逃れるためなのである。

藤壺と空蟬の出家をめぐる心情は、同じく「憂し」という言葉で表されている。二人の出家の共通点を考えると、二人は同じく、自分に恋心をもつて迫る継子から逃げるために出家したということが言える。藤壺の方は源氏から逃げるためであり、空蟬の方は河内守から逃げるためであつた。藤壺と空蟬の他に、女三の宮と浮舟もつらい男女関係から逃れるために出家した。

⑥うき世にはあらぬところのゆかしくてそむく山路に思ひこそ入れ

(横笛 三三六)

⑦「世の中にはべらじ」と思ひたちはべりし身の、いとあやしくて今まではべるを、心憂しと思ひはべるものから、よろづにものせさせたまひける御心ばへをなむ、言ふかひなき心地にも、思ひたまへ知らるるを、なほ世づかずのみ、つひにえとまるまじく、思ひたまへらるるを、尼になさせたまひてよ。世の中にはべるとも、例の人に、ながらふべくもはべらぬ身になむ」と聞こえたまふ。

(手習 三三三)

⑥は女三の宮の場合であり、ここから、彼女が出家をもとめるのは「うき世」から逃れるためだと分かる。⑦は浮舟の場合であり、彼女は「世の中」を「心憂し」と思つて出家を願つてゐる。密通した女三の宮と浮舟は、それぞれ「うき世」、すなわち、男女の世から離れたくて出家を求めているのである。

女三の宮の密通に対する気持ちは「憂し」という言葉で何回も表されており、また、先述の⑥のように、この「憂し」という気持ちは彼女に出家を求めさせたのだが、彼女が出家する場面を見ると、「憂し」という言葉がなく、代わりに「つらし」「うらめし」という言葉が用いられている。

⑧大殿は、いとう人目を飾り思せど、まだむつかしげにおはするなどを、とりわきても見たてまつりたまはずなどあれば、老いしらへる人などは、「いでや、おろそかにもおはしますかな。めづらしうさし出でたまへる御ありさまの、かばかりゆゆしきまでにおはしますを」と、うつくしみきこゆれば、片耳に聞きたまひて、さのみこそは思し隔つることもまさらめ、と恨めしう、わが身つらくて、尼にもなりなばの御心つきぬ。(柏木 二九二)

⑨「尊きことなりとも、御身弱うては行ひもしたまひてんや。かつはつくるひたまひてこそ」と聞こえたまへど、頭ふりて、いとつらうのたまふ、と思したり。つれなく恨めしと思すこともありけるにや、と思たてまつり

たまふに、いとほしうあはれなり。とかく聞こえ返さひ思しやすらふほどに、夜明け方になりぬ。帰り入らんに、道も昼はしたなかるべしと急がせたまひて、御祈禱にさぶらふ中に、やむごとなう尊きかぎり召し入れて、御髪おろさせたまふ。(柏木 二九七)

⑧では、不義の子を産んだ女三の宮は源氏のつめたい態度を恨めしく思い、わが身がつらくて、尼になつてしまいたいと思つてゐる。女三の宮の「恨めし」「つらし」という気持ちは、次の⑨の出家の場面にもまた語られる。女三の宮の密通に対する気持ちは、「憂し」という言葉も含め、いろいろな言葉で語られるが、「つらし」「恨めし」という気持ちは、出家する場面以外はどこにも語られないのである。

女三の宮の出家の翌日、六条御息所の物の怪が姿を現した。

⑩後夜の御加持に、御物の怪出で来て、「かうぞあるよ。いとかしこう取り返しつと、一人をば思したりしが、いと妬かりしかば、このわたりにさりげなくてなん日ごろさぶらひつる。今は帰らん」とてうち笑ふ。いとあさましう、さは、この物の怪のここにも離れざりけるにやあらんと思すに、いとほしう悔しう思さる。(柏木 三〇〇)

物の怪の「日ごろさぶらひつる」という言葉から、物の怪が数日間女三の宮に取り付いていたことが分かる。このように、女三の宮の出家は物の怪との関わりがあつたと考えられ

る。

⑪物の怪「わが身こそあらぬさまなれそれながらそらおぼれる君はきみなり

いとつらし、つらし」と泣き叫ぶものから、(中略)「なほみづからつらしと思ひきこえし心の執なむとまるものなりける。その中にも、生きての世に、人よりおとして思し棄てしよりも、思ふどちの御物語のついでに、心よからず憎かりしありさまをのたまひ出でたりしなむ、いとうらめしく。」

(若菜下 一二七)

⑪は紫の上が病氣をした時に出現する六条御息所の物の怪の言葉だが、ここで物の怪は何回も「つらし」という言葉を繰り返す、また、源氏を「恨めし」と思っていることが分かる。女三の宮の出家する時の気持ち「憂し」という言葉によつてではなく、いつもとは違う「つらし」、「恨めし」という言葉によつて表されることについては、六条御息所の物の怪の影響が考えられる。彼女は出家する時、六条御息所の物の怪に取り付かれていたので、「憂し」の代わりに、物の怪と同じく「つらし」、「うらめし」という気持ちの言葉を使ったのだと考えられる。そして、物の怪が退散した後、「憂し」という言葉はまた使われるようになり、一方、「つらし」、「うらめし」は使われなくなるといふことなのである。

ここまで見て来たように、密通した女性たちは、それぞれ「憂し」という気持ちで出家を求めている。「憂し」という気

持ちの対象に「身」と「世」が多く見られるが、「身」に対する思いをもつとも数多く持つてゐるのは空蟬であり、一方、「世」に対する思いをもつとも数多く持つてゐるのは浮舟である。浮舟の「世」に対する思いは、彼女が死と出家を決意する時にしばしば述べられている。

⑫「まろは、いかで死なばや。世づかず心憂かりける身かな。かくうきことあるためしは下衆などの中にだに多くやはあなる」とて、

(浮舟 一七三)

⑬からだにうき世の中にとどめずはいづこをはかと君もうらみむ

(浮舟 一八五)

⑫⑬で、浮舟は自分がこの世では生きていけないと思つて、この世から逃れるために水に身を投げて死を決意した。しかし、それは果されず、横川僧都に救われてしまった。その後、前述の⑦のように、彼女はふたたびこの世を棄てるために出家を決意した。これについて、増田繁夫氏は、浮舟は「尼になることを死ぬのと同様のことと考えてゐる。死ぬかはりに尼にならうとしたのである。反省的に出家を考えてゐるのではない。」と論じている。浮舟は薫と匂宮とのつらい三角関係のせいで、「憂き世」から逃れたい意志が深まっていき、この世を棄てるために死と出家を決意したのだ。それは次の浮舟の歌からもはっきり見られる。

⑭「亡きものに身をも人をも思ひつつ棄ててし世をぞさらに棄てつる」

(手習 三二九)

「世を棄てる」は第一節で見たように男性の出家によく用いられているが、「源氏物語」の女性の中で「世を棄てる」という言葉を使って自分の出家を述べるのは浮舟だけである。浮舟と他の女性の相違点を考えると、浮舟は出家後、すべてを棄て、新しい世界で出家生活をするが、他の女性は出家後、恋人や子供の世話になり、もとの世界に住んでいる。藤壺は出家後も宮中に入りし、空蟬は源氏の世話になる。六条御息所は娘と一緒にもとの場所に住んでいる。女三の宮は最初は源氏の世話になり、のちに薫の世話になる。浮舟だけがすべてを棄て、夫の世話にもならず、新しい世界で出家生活をする。そのため、「世を棄てる」という言葉は、他の女性の出家には用いられず、浮舟の出家の場合にしか用いられないのだと考えられる。

六条御息所は源氏とのつらい関係のせいで、「憂し」、「つらし」という気持ちになることがあるが、彼女の出家の理由は、前述の四人の女性とは違い、男女関係から逃れるためではなく、また、「憂し」という気持ちで出家するのでもない。^⑮なほ、かの六条の古宮をいよく修理しつくるひたりければ、みやびかにて住みたまひけり。よしづきたまへること古りがたくて、よき女房など多く、すいたる人の集ひ所にて、ものさびしきやうなれど、心やれるさまにて経たまふほどに、にはかに重くわづらひたまひて、ものいとい心細く思されければ、罪深き所に年経つるも、い

みじう思して、尼になりたまひぬ。

(落標 二九九)

^⑮は六条御息所の出家する場面である。彼女は伊勢から帰京した後、急に重い病気をわずらい、心細く、しかも齋宮のところで何年も過ごした罪の深さを心配し、出家したのである。しかし、彼女は出家した後、すぐ亡くなってしまった。出家してから死ぬまでの間には遺言の場面しかないが、その場面では、彼女は「尼」や「入道」とは呼ばれず、「女」と呼ばれている。

^⑯かくまでも思しとどめたりけるを、女もよろづにあはれに思して、齋宮の御ことをぞ聞こえたまふ。

(落標 三〇〇)

^⑯は源氏が出家した六条御息所を訪れる場面であり、ここで彼女は「女」と呼ばれている。熊谷義隆氏は、「六条御息所の「女」呼称は、理性に反乱する感溺の情を示すものだったのだ」と論じている。六条御息所は出家前、何回も「女」と呼ばれたが、出家後もまだ「女」と呼ばれるのは、彼女がまだ「女」としての執念が断ち切れないことを強調するためだと考えられる。彼女は死後も「尼」や「入道」などと呼ばれることがないのである。他の女性の場合を見てみると、彼女たちは出家後「尼」や「入道」という呼称で呼ばれることがある。

^⑰入道の宮よりも、ものの聞こえやまたいかがりなされむと、わが御ためつましけれど、忍びつつ御とぶらひ

常にあり。

(須磨 一五五)

⑬ 尼君も、ものあはれなるけはひにて、「かかる方に頼みきこえさするしもなむ、浅くはあらず思ひたまへ知られはべりける」と聞こゆ。
(初音 一五〇)

⑭ 夏ごろ、蓮の花の盛りに、入道の姫宮の御持仏どもあらはしたまへる供養せさせたまふ。
(鈴虫 三六二)

⑮ 文とり入れて見れば、「入道の姫君の御方に。山より」とて、名書きたまへり。あらじ、などあらがふべきやうもなし。いとほしたなくおぼえて、いよいよ引き入られて、人に顔も見あはず。
(夢浮橋 三七二)

⑯ では、出家した藤壺が「入道の宮」と呼ばれており、⑬では、空蟬は「尼君」と呼ばれている。そして、⑭では、女三の宮は「入道の姫宮」と呼ばれており、⑮では、浮舟は「入道の姫君」と呼ばれている。しかし、六条御息所は他の女性とは違い、出家後は一回も「尼」や「入道」などと呼ばれることがない。彼女は出家前も出家後もずっと「女」として描かれ続けているのである。

ここまで眺めて来たように、女性の方は男性とは違い、道心によつてではなく、それぞれの抱える様々な理由で出家を求めており、特に、つらい男女関係のせいで出家を願う場合が多いと分かった。山本利達氏は、藤壺、女三の宮、浮舟が、男との関係から逃れようとして出家していることは、源氏や薫が出家に終始憧れをもちながら「ほだし」に引かれて愛情

の世界に生きていることとは対照的であると述べている。女性の方は、男性とは違い、男女関係のことが出家の絆にはならず、逆にそれによつて出家してしまう傾向があるのである。

以上、出家に関わる言葉を考察し、「源氏物語」における男女の出家のあり方を見て来た。「源氏物語」の人たちはさまざまな理由で出家するが、男性の方は、「世を厭う」、「世をあぢきなく思ふ」などの厭世的感情を持ち、そして出家を志向するという型が一般的である。一方、女性の方は、それぞれ個性的に描きわけられているが、つらい男女関係のせいで「憂し」という気持ちになり、そして出家を志向する者が多い。この物語の男性たちが、出家生活に憧れを持ちながらも、それぞれ絆に引かれて俗の世界に生き続ける点特徴的である。また、彼らの出家の絆となるもののほとんどは女性である。男性の多くは、女性に心を引かれて出家できないのに対し、女性の多くは、男性から逃れるために出家する。このような対照的な男女の出家のあり方は、他の物語には見られない、「源氏物語」における出家の特徴なのである。

注

- (1) 山本利達「出家への心情」『源氏物語攷』塙書房・平7
(2) 山中裕「源氏物語を読む」吉川弘文館・平5

- (3) 鈴木日出男「光源氏の道心―光源氏論」『講座源氏物語の世界』第七集、有斐閣・昭57
- (4) 阿部秋生「光源氏の出家」『光源氏論―発信と出家』東京大学出版会・平1
- (5) 増田繁夫「浮舟の出家」『日本文学研究大成源氏物語Ⅰ』国書刊行会・昭56
- (6) 熊谷義隆「六条御息所の生霊について―その発生を中心に」『研究講座源氏物語の視界3』新典社・平8
- (7) 前掲注(1)

※本文の引用は、日本古典文学全集『源氏物語』(小学館)によった。

(Chotikaparakai Attaya / orsven *Wanlyant*)

シラパーコーン大学非常勤講師)